

目標共有の難しさと重要性

キーワード：COPM, 目標設定, 治療者の気づき

松田 風人

気仙沼市立病院 リハビリテーション室

【報告の目的】

今回、後頭葉を中心とする脳梗塞の症例を担当する機会を得た。治療経過の中で治療者と症例が考える目標に違いが生じ、「意味のある作業」を提供できているのかが不明確となった。解決策として用いたカナダ作業遂行測定 (Canadian Occupational performance measure: 以下 COPM) により目標共有を図り、退院後の具体的な生活場面を想定した作業療法を実施し、治療効果が認められたため以下に報告する。

【事例紹介】

70歳代後半の女性。X年Y月Z日に右後頭葉～頭頂葉、右小脳半球に脳梗塞を発症し入院となる。夫、息子夫婦との4人暮らしでキーパーソンは別居中の娘。病前は日中独居で家事全般をこなし、週に1度友人のお茶会や趣味の日本舞踊に参加するなど社交的であった。22病日に急性期病棟から回復期病棟へ転科となった。

【作業療法評価】

身体機能面は、四肢に著明な麻痺はないが、軽度の体幹失調を認めた。入棟時 FIM108点と ADL は概ね自立レベルであり、模擬環境での家事動作も可能であった。左同半盲を呈していたが「左が見えにくい」ということは認識していた。高次脳機能面では、注意障害、道順障害、軽度記憶障害、視空間認知障害である距離感・位置把握能力の低下を呈していた。病棟内では、歩行時に右側の物やすれ違う人にぶつかる様子が見られていた。

【介入の基本方針】

介入時より「日本舞踊に復帰し友人とまた踊りたい」との発言が聞かれており、治療目標に設定した。位置・距離感に対する機能訓練を行い、適宜、日本舞踊再開に向けての訓練プログラムを提案した。しかし「今しなくても時間が経てば出来るよ」などの発言が聞かれるようになり、治療者と症例の目標に解離が生じ、意味のある作業を提供できているのかが不明確となった。そのため46病日に COPM を用い治療者と症例間で話し合い、具体的な目標の再設定と治療プログラムの変更を

行った。

【作業療法実施計画】

本人のしたい作業に対し、重要度/遂行度/満足度 (以下○/○/○と示す) の3項目を10段階で点数をつけ、初回時と再評価時の点数を効果判定材料とすることにした。目標として、近所を安全に歩く (5/5/8)、物・人にぶつからないように歩く (4/9/9) の2つが挙げられ、退院後の具体的な生活場面を想定し、退院日までの1週間、1日1時間の作業療法を行った。訓練内容としては、横断歩道や人通りの多い場所での歩行訓練を実施した。通路幅や距離の確認を訓練前後に行い、結果をフィードバックし、気づきを促した。

【結果】

最終評価時は、近所を安全に歩く (6/8/9)、物・人にぶつからないように歩く (8/9/8) となり、初回に比べ重要度・遂行度の点数は上昇した。加えて病棟内でも廊下幅に合わせ、人や物を避けて歩く様子が見られた。一方満足度の点数に大きな変化はなかった。

【考察】

今回、症例の治療を通し、目標共有の難しさと重要性を再確認することができた。症例の HOPE と治療者のニーズを共有するために COPM は有用なツールであった。会話の中で症例自らが問題点を整理し、目標を具体化し、主体的に訓練に取り組むことができた。そのため、症状への認識が促され、病棟生活に汎化することが可能であったと思われる。

この経験を活かし、今後は対象者との会話を1つ1つ丁寧に分析し、話し合い、退院後の生活を共に考えていきたい。また目標を実現するために何が必要なのかを共有し、意味のある作業を提供できるよう努めていきたい。

COPM, AMPS を用いた意味のある作業に焦点を当てた上肢機能アプローチの経験

キーワード：COPM, AMPS, 上肢機能

大川 洋平¹⁾ 安宅 航太²⁾

1) 篠田総合病院 2) 東北大学病院

【はじめに】

近年、脳卒中後の上肢麻痺に対し意味のある作業に焦点を当てた課題指向型訓練を施行する例がある。その先行研究では回復期病棟患者に約1ヶ月間、CI療法に準拠した上肢集中訓練を施行し、作業遂行技能評価（以下AMPS）の成果を検証するも、AMPSは有意な変化を認めなかった¹⁾としている。今回、家事復帰を希望する症例に、CI療法に準拠した上肢集中訓練を実施した。結果、麻痺手を補助的に使用した両手動作にて家事の再開に至り、AMPSの改善も認めため以下に報告する。尚、本報告に際し症例より書面にて同意を得ている。

【症例紹介】

60代、男性。右放線冠の脳梗塞にて左片麻痺を呈す。発症47日目に当院回復期病棟へ転院。初回評価（49病日）、FMA、U/E33点。STEF30点。MAL、AOU1.53点、QOM1.32点。握力（左）4kg。MMSE28点。表在感覚、軽度鈍麻。ADLはBI55点、FIM73点。病前ADLは自立。弟と二人暮らし。家事全般を症例が従事していた。

【作業療法介入：目標設定と作業遂行評価】

COPMを用いた面接を実施。弟のために「麻痺手を補助手とした両手動作にて料理や食器洗いが行える」との家庭内役割復帰への希望が挙げられた。

（重要度10、遂行度・満足度2）。両作業を目標とし、AMPSにて作業遂行評価を実施。両手動作における麻痺手の分離運動の低さ（食材や食器の把持や固定、上肢の空間保持）が問題として見られた（運動技能-0.1、プロセス技能0.8ロジット）。
 <作業遂行能力向上に向けた上肢の集中訓練>

介入はCI療法の構成要素（課題指向型訓練とTransfer package）を参考に51病日から139病日の5回/週、一日3.5時間（OT1.5時間、自主練習2時間）にて行った。初期は麻痺手の随意性向上目的にShapingに比重を置いた課題（重さや形状の異なる物品の把持や運搬等）を難易度調整を図り施行。76病日には「まな板で野菜が握れそう」等の発言が聞かれた。（COPM：遂行度4、満足度

5）。84病日からはTask Practiceを重視し、目標に近い作業（材料を包丁で切る、鍋の固定等）から補助手としての両手活動を実践。訓練毎に麻痺手の使用状況や作業遂行へ反映させるための解決策を話し合った。112病日には一連の調理訓練を開始。回数を重ねる毎に両手の協調性と遂行能力は向上し、「自分で作るのが一番旨い」と自信を覗かせた（COPM：遂行度・満足度6）。

【結果：141病日目】

FMA48点。STEF47点。握力11kg。MALはAOU2.84点、QOM2.67点と改善。ADLはBI100点、FIM123点とADLは自立。目標とした料理や食器洗いは麻痺手を使用（食材や鍋等の補助的固定や運搬）し、作業が可能となった。AMPS、運動技能0.9、プロセス技能1.3ロジット。COPMは両作業共に遂行度7、満足度8。退院後、麻痺手を参加させた朝夕食の準備を再開している。

【考察】

今回、症例の望む作業獲得に向け上肢機能及び作業遂行技能の改善に成果が得られた。先行研究はFMA60点台と軽症例でありAMPS課題難易度上位の評価を施行していた。AMPSは作業遂行に焦点を当てた課題設定を特性とし、課題難易度の点で麻痺手の能力に適さない事が考えられ、その中で、実用的な麻痺手使用に至った事が作業効率の低下を招き、技能の改善に至らなかった可能性がある。それに対し、中等度麻痺の本症例は目標に向けた作業遂行の質を考慮し、あくまでも非麻痺手を主体とし、麻痺手を補助的に用いる事が課題難易度に適応した作業遂行に至ったと考える。以上から中等度例では麻痺手の使用量を調整した両手活動が作業遂行技能の改善に繋がる可能性が示唆された。

【文献】

1) 唐松友ほか：課題指向型訓練とTransfer packageにおける上肢機能評価と作業遂行評価の特徴。日臨作療研1：21-25, 2014.

回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者の入院時認知 FIM と運動 FIM 効率との相関

キーワード：脳卒中，FIM，認知

佐藤浩¹⁾ 茂木紹良²⁾

1) 鶴岡協立リハビリテーション病院 2) 鶴岡協立リハビリテーション病院 医師

【はじめに】

平成 28 年度から診療報酬改定で回復期リハビリテーション病棟入院料には実績指数というアウトカム評価が加わった。この実績指数は FIM の運動項目の改善が計算の基となっている。しかし临床上、認知のレベルが日常生活動作能力向上に影響を与えていることを実感している。今回当院回復期リハ病棟での 5 年間のデータを利用し、認知 FIM が運動 FIM 効率の影響を調べ、若干の知見を得たので、ここに報告する。

【対象】

当院の回復期リハ病棟に入院した脳卒中患者のうち、2013 年 12 月から 2018 年 11 月までに退院した患者。ただし、在院日数 181 日以上、発症から入院までの日数が 91 日以上は除いた。

【方法】

入院時運動 FIM と運動 FIM 効率の関係について、入院時運動 FIM を 10 群に分け、各群の平均運動 FIM 効率を調査した。また入院時認知 FIM と認知 FIM 効率の関係について、入院時認知 FIM を 10 段階に分け、各群の平均運動 FIM 効率を調査した。

入院時認知 FIM と入院時運動 FIM に相関があるか、同様に、入院時運動 FIM と運動 FIM 利得・効率との相関、入院時認知 FIM と運動 FIM 効率との相関、入院時認知 FIM と運動 FIM 利得との相関について調査した。入院時運動 FIM と運動 FIM 効率との相関は、入院時運動 FIM を 3 群に、同様に入院時認知 FIM 3 群に分けた調査も行った。(Spearman 順位相関係数の検定)

また上記の入院時運動 FIM の各群の中で、入院時認知 FIM の各群間の FIM 運動効率の平均値の差において一元配置分散分析を使用して分析を行った。

【結果】

入院時運動 FIM と運動 FIM 効率の関係は、61～68 点群がピークを示す山形のグラフに、入院時認知 FIM と運動 FIM 効率の関係は、29～31 点

がピークを示す山形のグラフとなっている。

入院時運動 FIM と入院時認知 FIM では強い相関があった(相関係数 0.74, $p < 0.001$)。

入院時運動 FIM と運動 FIM 効率との相関は、入院時 FIM が低い患者群・中間患者群・入院患者全体での相関係数は正の相関、入院時 FIM が高い患者群は、相関を認めることはできなかった(入院時運動 FIM が高い患者と運動 FIM 利得の相関では負の相関)。同じく入院時認知 FIM を 3 群に分けると、入院時 FIM が低い患者群・中間患者群・入院患者全体での相関係数は正の相関、入院時 FIM が高い患者群は、相関を認めることはできなかった。(入院時認知 FIM が高い群と運動 FIM 利得の相関では負の相関)

入院時運動 FIM が低い群・中間群では入院時認知 FIM の各群間の運動 FIM 効率の差では、有意に入院時認知 FIM が高かった。

【考察】

入院時認知 FIM と入院時運動 FIM は強く相関している。つまり入院時認知 FIM が高ければ、入院時運動 FIM が高い傾向にある。ただ入院時運動 FIM の総合得点は 91 点であり、FIM 運動利得は天井効果によって限界が出てしまう。ゆえに入院時運動 FIM も入院時認知 FIM も FIM 運動利得は負の相関を示した。しかし FIM 運動効率においては、無相関になっている。これは入院時認知 FIM が高い患者群は、在院日数が短いことが考えられる。

また入院時運動 FIM の低い患者群、中間群において、入院時認知 FIM が高いほど、有意に運動 FIM 効率が高いことが明らかになり、認知状態が運動レベルの改善に影響を与えることが示唆された。ただ群間においての年齢などの交絡因子の影響を排除できておらず、今後さらに分析を続けていきたい。

閉じこもりから職場復帰までの協業的作業療法 ～役割再獲得による家族内の互助が原動力となった事例～

キーワード：高次脳機能障害，協業，エンパワメント

菅原 陽平

山形県・酒田市病院機構 日本海総合病院リハビリテーション室

【はじめに】

脳外傷後の高次脳機能障害で著明な参加制約を認めた A 氏を、病後 153 日目から外来で担当した。A 氏、家族との協業的作業療法によって A 氏の役割が再構築され、家族内互助の成立から職場復帰に繋がった。その経過を報告する。本発表は A 氏と家族から書面にて承諾を得ている。

【事例紹介】

40 歳代後半の男性で、妻と娘 2 人と同居。病前は寛容な性格で子供の面倒見も良く、多趣味。土木建築業に従事し、職務にも自動車運転が必要。回復期病院を退院後、病後 153 日目で週 1-2 回の外来開始。開始 1 ヶ月で FIM : 116 点 (運動 88 点, 認知 28 点), Wechsler Adult Intelligence Scale III (WAIS-III) : 言語性 IQ 70, 動作性 IQ 98, IQ 81, Frenchay Activities Index (FAI) : 9 点, Life-Space Assessment (LSA) : 8 点。左肩関節の ROM 制限, Working-memory の低下, 記憶障害と記憶力低下, 病状の理解不足や楽観的思考による問題解決能力の低下あり。妻は「いろいろと変」「漢字が書けない」との発言や、「前に家族を分からず、そのショックか子供が話しかけない。夫を人に会わせたくない。仕事より家事ができればいい」と述べた。

【作業療法実践と経過】

まず Shared decision making を目的に, COPM を用いながら, A 氏と妻から A 氏の生活歴と役割を聴取し, 目標設定を行った。その結果, 重要度から『ADL』, 『夫・父親』, 『仕事』, 『趣味』, 『地域 (父母会)』に分類され, スコア (A 氏/妻) は遂行 4.0/2.6, 満足 3.0/3.0 だった。

今後, A 氏に社会的交流による問題が生じ得ることは容易に予測できた。そのため, 基盤となる家族内の信頼関係構築を第一に, 段階的に生活行為の拡大を目指す方針とした。自宅内役割の再興から屋外活動の再開と支援までを第 1 期 (病後 153 - 332 日目), 以後の職場復帰までを第 2 期 (病後 332 - 408 日目) とした。第 1 期では, 代償手段の

使用と反復練習の他, 馴染みある環境での実際的かつ動作を伴う練習が効果的で, A 氏が内容を決める事で自宅でも習慣化できた。また, 趣味や職業関連の作業を手段として, 妻や子供との交流機会になるよう, 必要に応じて家族に実践場面を見学させた。なお計画や調整は外来時に行い, 自宅で実践した。第 2 期は復職関連の課題解決を目的に, 主治医や職場, 関係機関との情報交換を主として, 今後生じ得る問題への支援, 練習を行った。

【結果】

第 1 期末で FIM : 123 点 (運動 91 点, 認知 32 点), LSA : 46 点, FAI : 30 点。妻, 子供とも交流機会が増加。妻の評価的視点や対応能も養われ, 生活場面での問題点抽出や共有がしやすくなった。A 氏が不都合を感じる出来事があっても「娘達がいるので, それを支えです」との発言があった。妻からも, 障害ある A 氏を受容し, 支えていく努力をするとの話があった。第 2 期末で WAIS-III : 言語性 IQ 80, 動作性 IQ 105, IQ 90, LSA : 92 点, FAI : 38 点。COPM のスコア (A 氏/妻) は, 遂行 8.2/7.8, 満足 8.2/7.0 と向上。自動車運転も再開し, 職場復帰できた。妻が不安を述べた際, A 氏が妻を励ます発言もあり, 妻から「心配事はありますが, もう十分, 私の夫です」と発言があった。

【考察】

障害を基盤とした体験が優位となり, 残存能力や代替となり得る A 氏の生きる力が, 家族との生活に繋がらなかった事で, 関係不良や著明な参加制約を生じていたと考える。家族内の思いを繋ぐため, 夫・父親の側面を含めた仕事の意味を見出し, 役割を基盤とした手段や目的を実践に含めた事が, 協業の成立と A 氏の役割再獲得に付与したと考える。また, 協業関係のなかで家族の思う A 氏らしさと残存能力を可視化し, 成功・失敗を介しながら一貫して家族内で共有できた事が, 娘や妻の障害受容と互助の成立に繋がったと思われ, A 氏の社会参加の原動力になったと考える。

退院後の生活を見据えた社会参加 ～目標設定等支援・管理料導入からの取り組み～

キーワード：社会参加，他者交流，目標設定等支援・管理料

高橋 正人 伊藤 美佳 石井 香織
山形ロイヤル病院

【序論】

当院は慢性期病院であり，リハビリテーション（以下リハ）目的や家族関係など様々な背景にて長期入院を必要とする患者が多い。平成 28 年度診療報酬改定により介護保険サービスへの円滑な移行を目的に目標設定等支援・管理料（以下管理シート）が新設され，高齢者に対し，社会参加を促す支援が求められている。

当院において社会参加への取り組みとして何を行うのかを検討するために，リハ職員へ社会参加に対するアンケートを実施した。その結果を元に社会参加への取り組みとして実施した事を考察を踏まえて報告する。

【方法】

入院に携わるリハ職員 19 名にアンケートを実施。内容は「社会参加に対する意識・関心，具体的な働きかけ」とし，意見を聴取。結果から社会参加への取り組みを検討し実施することとする。

【結果】

管理シート導入前の社会参加に対する意識として「外出練習や地域活動（サロンなど介護予防事業や地区行事など）への参加が必要」と社会参加に対して漠然としていたイメージを持っていた。具体的な介入では地域参加へどう繋げていけるのかを悩んでいると聞かれた。

管理シート導入からの社会参加に対する意識として「院内にて行える集団活動にて他患者やスタッフとの交流を促すことも社会参加に繋がられ，より身近なイメージを持つことができ積極的な取り組みとして重要性を再認識できた」と挙げた。意識の変化に伴って，入院生活内から地域への参加に繋がられるよう集団活動での積極的な他者交流を増やしていく，リハ時間外での他者交流への対応を病棟スタッフと連携を図り協力を仰ぐなど働きかけへも変化がみられた。

また，当院での取り組みとして季節感を取り入れたイベント，病棟にて運動や作業を中心とした集団活動，馴染みのある畑，収穫した野菜を利用した料

理を挙げ，どの活動においても他者交流を目的とした。

【考察】

リハ職員の意識と働きかけの変化は管理シートの導入がきっかけとなり，慢性期病院としても社会参加の重要性を再認識する機会が持て，入院生活内で行っている他者交流自体が社会参加であると気付けたことが大きいと考える。また，これらの気付きによって，より積極的な他者交流を増やすように病棟スタッフの協力を図り，連携を密に行えた原動力になったと考える。

取り組みにより入院内でも地域で行っていた交流を引き出すことができ，患者からは「他者と楽しむことができた」など満足感が得られた。また，他者交流の機会が増えたことで交流意欲が増した，外出もしたいと前向きな意見が聞かれた。高齢者の社会参加のあるべき姿として「生きがい」など目的を持って楽しめることが社会参加¹⁾であり，「生きがい」の対象に他者交流²⁾が挙げられている。また，内閣府の調査³⁾では高齢者の交流促進の必要条件は「交流機会の設定」とあり，集団活動等を交流の場として設定したことで，患者は他者交流や外出など社会参加に目を向け促すことができたと考える。

現在ではイベント毎に他患者のみでなく，当院併設の保育室と協力し，園児との交流により他者交流の幅を広げることができた。また，趣味に取り組めるクラブ活動を新たに導入している。クラブ活動では少人数，同趣味活動を主とした集まりであり，イベントよりも顔馴染みになりやすく，患者同士の積極的な会話が促せると考えたが実際はまだ促せてはいない。より質の高い他者交流を行えるためにも今後は作業療法の観点・要素までを考えて介入していきたい。

【参考文献】

1) 一般社団法人(2016)健康・生きがい開発財団 2) 柴崎幸子(2011)高齢者の生きがいに関する文献的研究 3) 内閣府(2014)

「退院後の生活」を知ることの大切さ ～自分の関わりを振り返る～

キーワード：退院後の生活，実生活の評価，予後予測

高橋 夏姫 宮田 良子 宮田 信悦
大曲中通病院

【はじめに】

退院後、患者さんが実際にどのように生活を送っているかを知り、自分自身の関わりを振り返る機会はこれまで少なかった。今回、パーキンソン病の患者の自宅退院に向けて関わった。退院後の様子を、訪問リハに同行したことで自分の関わりを振り返る機会となった為、以下に報告する。尚、発表に際し、症例本人には書面での同意を得た。

【症例紹介】

70歳代前半女性。パーキンソン病。元々独居であったが、約1カ月前より下肢痛が出現し歩行困難。その頃から週5日デイケアを利用し、娘家族(娘、婿、孫2人)が症例宅で過ごす様になった。リハ目的で当院入院。過去に自宅内で転倒し、2度大腿骨骨折の既往あり。

【入院時経過】

介入開始時は両大腿後面の痛みが強く、基本動作・ADL全般に介助を要する状態であった。動作パターン・栄養の改善を図り、約1カ月後下肢の痛みは軽減し見守りの下トイレに行くことが可能となった。症例はあまり人に頼らず、頑張り屋な性格。

【症例・家族の希望】

症例・家族共に自宅退院を希望していたが、症例は「デイケアに毎日いくのは嫌」と希望。家族は日中1人で過ごすことに対し不安があり、入院前同様のサービス利用を希望。リハ担当としては症例の希望に沿いたいと考え家屋調査、サービス調整の検討をした。

【退院支援】

家屋調査では、伝い歩き方がスムーズであったため屋内は伝い歩きで移動を提案。夜間はポータブルトイレを使用し、使用後の処理は家族に行ってもらうこととした。全体的に床に物が多いため、家族に床の物の撤去を依頼した。家族は症例に協力的な印象であり、家族関係は良好と思われた。家族も予想以上の回復を喜んでいたが、過去の転倒を考えると1日中1人で過ごす事にはまだ不安

が残る様子であった。そのため、痛みの残存、症例の性格、進行性疾患であることなども考慮し、訪問リハ、訪問看護の利用を提案。家族の了承も得られ無事自宅へ退院された。

【退院後の実生活】

退院後、訪問リハスタッフから、痛みの悪化や転倒、予想以上の活動量、逆流性食道炎や便秘といった全身状態が優れないなどの情報あり。そこで訪問リハに同行し、実際の生活を確認した。痛みにより歩行が不安定となっており、入院中使用していた歩行車を導入。また、家族から活動を制限されており、家族に依頼した環境調整はされておらず訪問リハスタッフとしても家族はあまり協力的でないと感じているとのことだった。その他、季節の変化に伴い、痛みの悪化や環境に変化があった。また、体重も2kg減少していた。

【考察】

自分の関わりを振り返り、入院中や家屋調査時に考慮すべきだった点として①性格や入院中の様子、生活歴から具体的な生活を予測すること、②一瞬の動作能力だけでなく、今後継続していくことを考慮すること、③疾患の特性や全身状態、④1日だけでなく週・月・季節・年単位の生活を考えること、⑤本人だけでなく、家族構成や家族同士の関係性、家族の生活を考慮する事も重要であると感じた。また退院後の実際の生活を確認する事のメリットとしては、①住み慣れた生活空間だからこそ「本当の生活」をみることが出来る点、②生活を継続する中で見えてくる問題・変化を知る事が出来る点、③家族同士の関係性など、一瞬の関わりでは評価しきれない部分を知る事が出来る点であり、実際の生活空間で継続的に関わる訪問リハビリの重要性も改めて感じた。また、実際の生活を確認することで自分自身の関わりを振り返る事ができ、退院後の生活を考える視点を学ぶことで予後予測能力を高めていくことができると考えられた。